第一部　労働者協同組合の政策と取り組み

病院の注射針と医療廃棄物の取り組み

捨てるゴミの向こうに人がいる

松沢　常夫（じぎょうだん新聞編集長）

病院の管理と清掃から見えてきたもの

労働者協同組合らしい廃棄物処理の一つの典型をなしたのは、病院での汚染物・危険物処理に関してである。

中高年雇用・福祉事業団は現在、百をこえる病院の設備管理や清掃などの業務にたずさわっているが、清掃作業はきわめて危険な作業でもある。

とくに〝ゴミ出し〟と呼んでいるが、ナースステーション、汚物室、廊下等に設置してあるゴミ箱のゴミを台車に乗せ、所定のゴミ集積所まで運び、必要な分別がされていない場合は分別もする作業が危ない。ゴミ袋を持ち上げたり、袋をとりかえたり、ギューギュー押し込んだりという作業の際、ゴミ袋に混入していた注射針や便用剤アンプルのかけらで手や足を傷つけやすいのだ。

また、処置室をはじめ廊下、病室などにも注射針がよく落ちており、モップをしぼろうとした時、糸の中から注射針が出てきてゾッとしたとか、焼却炉で可燃物を焼却中に缶が爆発したとかの例もある。

さらに、洗濯業務をする中で、患者さんの体をふくタオルを脱水機に入れ、取り出そうとした時に、タオルの中に注射針が突きささっているのを見つけたり、手術着やシーツの中から長い針やハサミなどが出てきたこともある。

第一回清掃団員アンケート（一九八七年一〇月）の結果では、二人に一人が針を刺した経験があり、「三日から一週間に一度の割合で誰かが針を刺す」という職場もあった。

「院内で注射針を拾ったことがあるか」の問いには、「ない」という人は一割、「毎日拾う」「拾った数は無数」など、おどろくべき実態が明らかになった。

「じぎょうだん」新聞が改善をリード

こうした状態は、全国の事業団員と病院の皆さんの協力で、かなり改善されてきたのだが、そのきっかけとなり、改善運動をリードしたのは事業団の機関紙「じぎょうだん」新聞であった。

八七年五月に私が事業団に来て、新聞編集に責を負うこととなってすぐ、病院で医師の部屋の「燃えるゴミ」のカンに捨てられていた瀬戸物の破片でケガをしたという団員の話を聞き、それを書いてもらったのだ。この記事を「捨てるゴミのむこうにも人がいる」と題して一面にのせると、「瀬戸物どころではない」という話が何人かから寄せられた。そして、たまたま立ち上がりの結団式の取材で訪ねたある病院現場で、「針をウデに刺した」「足に刺した」と、その跡を見せられ、案内されたゴミ置場で、何本もの針がブスッブスッと突き出ているビニール袋を見た。あまりのことに我が目を疑ってしまうほどだった。

こうした問題は、なんとかしなければと、それなりの改善が個別に進められてはいたが、針を刺してもあたりまえのこととなり、多くの場合、指をなめ、バンドエイドをはって終わりとなっているのが実情でもあった。

私はこの病院で見たことを記事にするとともに、「編集長から」の欄で、「どこそこのゴミ箱に針がありましたよ」と、病院職員にそのつど声をかける中で、改善されてきた例などを紹介し、「相手のいそがしさも理解しながら、問題点はきちんと話しあっていくということが『よい仕事』につながり、労働者どうしの連帯を深めていくことになる。各地の経験を通信してほしい」とよびかけた。

捨てるゴミの向こうに労働の意味を自覚する

こうして「捨てるゴミの向こう」というタイトルの連載記事が始まったわけだが、その直後、三重大学病院で二人の医師が注射針の誤刺によりB型肝炎で死亡する事故がおきたこともあって、注射針事故の問題は事業団全体の問題となり、さまざまな情報が寄せられ、改善運動が進むことになった。

紙上では、本来、人の健康と命を守るという使命をもった病院が、逆に患者さんや、病院で働く人たちを危険にさらしてしまう一面をもっているという事実を、病院に関わるすべての人びとが深刻に受けとめ、もう一度、自分たちの労働のあり方、人と人、労働者と労働者の関係のあり方、医療労働者としての思想を問い返す必要がある、という提起をくりかえしていった。

個人的に処理されていた問題を組織的・社会的な問題とし、相手を告発するのではなく、自らが改善提案をしつつ、病院職員といろいろなレベルでの話しあいを重ね、連帯をつくり出すなかで解決をめざす――こうしたとりくみが全国で急速に進んだ。

八八年九月一五日付「じぎょうだん」新聞は、中間総括の座談会を組んだが、ここでは、こんな意見が出されている。

「捨てるゴミの向こうを考えようという提起は、労働者全体のことを考えて仕事をしようという提起だ。針が落ちていた時、その場で堂々と〝落ちてました〟と言えるのも、そうすることが全労働者のためになることだと確信しているからだ。だから新聞七〇部がアッというまにふえた」

（大牟田、米の山・桑宮）

「看護婦さんは注射針入れのビンをワゴン車に乗せて持ち歩いてくれてる。〝そんなこと忙しくて〟という人もいたが、〝針をそのままにしといたら、まだだれかがやらなきゃならない。一番初めのところできちんとするのが一番確実〟と話した。ブスッとされちゃったけど、〝おたがい労働者なんだから、思いやりでいきましょう〟と、くり返し話した」

（東葛・肥後）

「中材研究会（全国から四〇〇人参加）に呼ばれて話したが、東京健生病院の職員もきていて、あとで〝本当に大事なことを言ってもらって、自分たちの業務が問われました〟と言ってくれた」　（東京健生・田中）

このことは、第二回全国アンケートで、もっとも安全な病院として位置づけられた生協戸塚病院の斉藤総婦長の話（89・3・15号）とも共通している。

「〝いそがしいから〟と言っていたのでは何もできない。大変だから力を合わせよう、針の処理もきちんとしよう、と話している。清掃の人との関係もそうだが、看護婦どうしも交替制だから、つぎの人がやりやすいように考えながら整理することが大事。〝捨てるゴミの向こうに人がいる〟というのは、すべての仕事に共通することだ」

労働者協同組合としての新しい働き方

この「捨てるゴミの向こうに……」というタイトルについては、京都大学の池上惇教授も、「人間の価値観を根底から問いかけ、社会のあり方を痛烈に批判する」ものと評してくれたが、たしかに、この間のとりくみは、自らの労働の意味とその影響についての自覚

と責任、働くものどうしの新しい連帯と信頼の関係、こうしたものを主体的に形成していく過程でもあった。

事業団の永戸祐三事務局長（当時）は、先の中間総括の座談会の中で、「注射針事故の背景には、さまざまな問題があるだろうが、解決のカギは、もっともっといろいろな人達が協力しあうことだ。資本主義は労働者を分断することで成り立っているが、みんながつながっている姿を見つめ、労働者の利益は共通だということを事実で示し、だからこそ連帯しようと提起してきた」「ネットワーク――人のつながり――という立場でものごとをとらえる目を養うこと、それは、本当の意味で民主主義を自覚する労働者に、仕事を通じて育っていく過程でもある」と指摘している。

事業団のこれまでの実践は、まだまだ不十分ではあるが、問題解決への〝カギ〟を確かに見い出し、築き始めたといえよう。

「じぎょうだん」新聞をふりかえる

なお、参考までに、働く者どうしのコミュニケーションがどのように発展していったのかを、「じぎょうだん」新聞の記事を分類してみてみたい。

事業団から病院への提起を主とするもの（A）から、徐々に病院側での対応や病院から事業団への提起（B）、懇談会など双方向のもの（AB）へと移っていき、進んだ病院への見学・交流（C）も始まり、総合的な提案（A2）へと発展することがわかる。

また、事業団内の経験交流等（D）は随時開かれているが、全国的な調査、会議がAB型をふやす重要な節目をなしていることも示されている。

さらに、アンケート結果がマスコミ等で報じられてから、社会的な広がりをもったコミュニケーションとなるが、その主なものを（E）とした（各新聞記事の最初のアルファベットは分類の型、タイトルの後の数字は発行西暦年月日を示す）。

なお、作業システムの改善は年をおって進んでいるが、本稿では誌面の関係で割愛させていただいた。

A　K病院現場からの投稿（87・7・1）

医師の部屋。燃えるゴミのカンに捨てられた、瀬戸物の破片でケガ。「分別をお願いしたが、〝捨てる〟ことにもう少し配慮がほしい。〝捨てるゴミの向うにも人がいる！〟」

A　東葛病院で進む改善（8・1）

針混入ゴミの出た部屋名を明らかにして注意を喚起。病院労組へも申入れ。感染病患者入院情報を提供してもらう。院内感染学習会を開いてもらう。

D　みさと健和病院で経験交流会（9・1）
あぶないめにあった経験と対処法の交流会。万一の場合のマニュアル作り。健康管理委員を決め、事故記録を詳しく記し、報告する健康管理ノートを作成。

E　事業団が厚生省に申入れ（9・15）

A'　群馬県玉村では町を通じて（10・1）
町を通じ（行政にも責任をもってもらうため）、医師会、歯科医師会に「針などはカンに」を要請。

AB　鬼子母神病院で貼り紙（10・15）
連載記事を婦長に。婦長会議で話してくれ、各所に「捨てるゴミの向うにも人が」の貼り紙もしてくれる。

D　注射針事故防止全国紙上アンケート（10・15）

E　都職労新聞が事業団のとりくみを特集（11・1）

D　アンケート結果発表（11・15）
事業団が常駐する四二の病院中、四〇病院二二三人から記名回答。就労四ヵ月以上で清掃を主とする一八七人の集計で、半数が「刺したことがある」ことなど判明。

※前出も参照。

B　新居浜協立病院で記録の要請（12・1）
「大事なことなので、針が落ちていたらノートにつけてみて下さい」と病院から。

AB　東京健生病院で歴史的懇談会（88・1・1）
総婦長、事務長、労組委員長、清掃団員全員が懇談。お互いに気付いたことを出しあい、安全な病院づくりへ心を通わせる。

AB　米の山病院でも（2・1）
事務長、総務課長、施設課長らと団員との懇談会。「共に医療を支える仲間として協力しあっていこう」と言われる。

B　福島生協病院（広島）で婦長会議（2・1）
「婦長会議で話しあいたいので新聞にのった資料下さい」。婦長会議後、各病棟に「捨てるゴミの向う……」のステッカーがはられる。

E　アンケート結果はマスコミ、医薬品業界紙、東京民医連新聞等で大きく報じられる（2・1）

AB　針刺し事故への対処―東葛病院（2・1）
針刺し事故発生。日曜なので当直看護婦に連絡。一緒にゴミ袋開く。看護婦はB型肝炎患者の入院の有無をたしかめ、カットバンで手当し、「ゴミ袋はみんなに見せるからそのままにして下さい」。翌日、病棟主任が「念のため」と予防注射。「院内感染予防学習会もやりたいので時間をとってほしい」と病院から。

E　日本環境感染学会総会でとりあげられる（2・15）

C　東京健生の団員が東葛へ（4・1）
東京健生病院の清掃団員全員が東葛病院を見学。団員が病院を大切にし、改善提案を何度も行なってきたこと、看護婦たちも自ら改善案を検討し徹底していることなどに感動。

B　東葛の新入看護婦研修会で（4・15）
新入看護婦研修会用に、婦長が「じぎょうだん」新聞のつづりを見にくる。講義の感想の中で「前の病院ではビニール袋に捨てていた。〝慣れれば大丈夫〟といわれたが、私も足に刺した。きちんとすることが身につけば、めんどうくさくもない」の声も。

E　産業医学会の研究会で日本福祉大学森靖雄教授がとりあげる（4・15）

E　大学病院臨床検査部技師長らの「感染に

関する懇談会」で事業団が報告（4・15）

A2　西淀病院に拾った針の一覧をつけて改善提案（5・1）

E　中材業務研究会で事業団が報告(6・15)

※前出

E　医療廃棄物研究会の事務局・東京産業廃棄物協会西村博信専務の話（6・15）

AB　西淀で清掃団員全員が婦長会に（7・15）

婦長会に事業団の清掃団員全員が出席して注射針が落ちている問題など話しあう。

A2　小豆沢病院への総合的提案（7・15）

A2　みさと健和病院への総合的提案（7・15）

患者の入院時にゴミ処理に関する説明文書を渡してほしいことなども提案。

D　「連載記事」中間総括座談会（9・15）

※前出参照

に学習会

て改善策だしあう

あとの処理など考えずに仕事

事業団を仲間と見てなかった

看護婦当時の眼

連続追及　捨てるゴミの向こう

そのまた向こうに人がいる

事業団で用意した注射針入れ